極覚

社研だより

第92号

令和4年3月

発　行　京都市小学校
教育研究会社会科部会

責任者　京都市小学校
社会科教育研究会
林　　正　和

今年度をふりかえって

京都市小学校社会科教育研究会
副会長　岡　　博　士

今年度は，林　正和新会長のもと研究会活動が推進されました。夏の一日社研で新たな研究主題**「『社会を見る目』を育てる社会科学習～子どもが社会とつながる授業のあり方～」**が提案され，その研究内容について研究部を中心に検討しました。研究主題は研究を方向づける道しるべとなる大切なものです。「研究主題を踏まえた社会科授業とはどのような授業なのか。」「どのような子どもの姿を目指すのか。」など，具体的な研究内容の共通理解を図るように拡大研究部会を行い，研究部と学年部長とで新提案を踏まえた授業づくりについて協議を行いました。研究主題に基づく指導案の形式についても検討され，新たな研究内容での実践が各学年部会で進められています。

各学年部会では，研究主題に基づく授業づくりの検討とともに，日々の授業についても話し合う学習会が繰り返し行われました。ある日の総合教育センターのアクティブラーニングエリアでは，複数の学年部会が集まり，各部会で熱心な協議が行われていました。若い先生を巻き込みながら，研究会活動が活発に行われている様子がうかがえました。学年部会を中心に研究会員が集い，社会科好きな子どもを育てる授業を追究することは，京都社研の研究会活動の基盤であり，教師として成長できる貴重な機会となります。

一方で新型コロナウイルスの感染拡大の影響は，今年度も続きました。様々な制限が加えられる中での研究会活動となりましたが，リモートによる本部企画や学年部会や各委員会の実施など研究を止めない工夫で乗り越えようとしています。そこには，コロナ禍により「何ができないか。」ではなく，「何かできる方法はないか。」と常に前向きに考え，実行する研究会員の研究に対する真摯な姿勢がありました。

各委員会の活動も進めてきました。プロジェクト研究では，特色ある京都市の様子を動画で見ることができるように映像資料を作成しています。実践講座委員会では，子ども体験教室や現地見学研修会は中止となりましたが，「社会科教材研究のためのリンク集」をより社会科授業で活用できるものに改訂を行いました。いずれも子どもが主体的に社会科学習に取り組むために有効な教材として活用できるでしょう。

また，本年度の研究集会は，２月２日（水）に山階南小学校で予定していましたが，コロナ禍により中止となりました。しかし，今年度の研究集会については新しい研究主題を実践を通して具体化する機会であり，研究授業に向けて授業者の猪股健悟教諭と研究部を中心に授業づくりについて検討を続けてきていました。集会は中止となりましたが，授業づくりの過程で学んだことを生かし，京都社研の研究を止めることなく進めています。

コロナ禍の今後の教育活動への影響は見通せないところですが，よりよい社会を形成する子どもを育てる社会科の役割を授業を通して果たしていけるように研究会一同，努力し続けてまいります。どうぞよろしくお願い申しあげます。

3年部会　「地域の人々の営みから学びを深め，自分と地域とのつながりを考える子ども」

極覧第91号にて，【３年生では，自分たちの身近な地域の社会的事象を観察・調査したり，地図や各種の具体的資料を活用したりして調べ，地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える。地域の様子や人々の姿を通して，それらが相互に関連しあっていることや自分とのかかわりに気づくことで，子どもたちの地域社会に対する誇りと愛情，地域社会の一員としての自覚を育てられるようにしたい。また，豊かな学びを実現していくために，「これまで」にとらわれず，新たな学びの形を創造していきたい。】と発信した。

このような考えのもと学年部会を行い，部員とともに授業づくりを行ってきた。コロナ禍にあり，集合して指導案検討を行うことができない時期もあったが，オンライン会議を活用し，研究会活動を進めた。唐橋小学校の辻本将佳教諭に提案授業を実践していただくことになり，その授業づくりにおいて部員とともに研鑽することができた。以下，その一端を報告する。

本年度の授業実践

- 唐橋小学校　　辻本　将佳教諭（２月）
  単　元　名　　「火事をふせぐ」

本単元では，火災から地域の人々の安全を守る働きについて，施設・設備などの配置，緊急時への備えや対応などに着目して，見学・調査したり地図などの資料で調べたりして，まとめる。それにより，関係機関や地域の人々の諸活動を捉え，相互の関連や従事する人々の働きを考え，表現することを通して，消防署などの関係機関は，地域の安全を守るために，相互に連携して緊急時に対処する体制をとっていることや，関係機関が地域の人々と協力して火災の防止に努めていることを理解する。その中で，主体的に学習問題を追究・解決し，学習したことを基に地域の安全を守るために自分たちにできることを考えようとする態度を養う。

本単元において大切にしたことを，研究の視点ごとに報告する。

子どもと「社会」がつながる単元構想の工夫

○「学校のまわりの様子」の学習で取り組んだ校区地図を活用し，地域の防災設備を調べることで，設備が様々なところに点在していることに気付けるようにする。

○「工場のはたらき」で取り上げたマンホール工場が製作する消火栓の蓋を資料として提示することで，地域内のつながりを実感することができるようにする。

子どもと「社会」をつなげる授業づくり

○単元の学習問題に対して予想をする場面では，火災現場での緊急対応について，シミュレーションを通して予想する。「火事だ！誰か通報を！」「助けを求めている人がいるぞ！」などの緊急事態を提示し話し合うことで，予想を具体的にしていく。子どもたちは，社会の人々がどのようなことをしているのかを多角的に考えることができる。

○単元の終末には，資料を分類・整理し，自分と社会とのつながりについて考えられるようにする。さらに，地域の一員として，「自分にできること」を話し合う。

子どもの意欲や深い学びにつながる評価

○ふり返りの時間に，「わかったこと」や「感じたこと」，「詳しく知りたいこと」などの観点でふり返り，自分自身で思考の状態を自覚できるようにする。

冒頭に述べたように，地域の様子や人々の姿を通して，それらが関連しあっていることや自分とのかかわりに気づくことができるような単元構想を組み立てた。今後も実践を重ね，子どもたちの地域に対する誇りと愛情，地域社会の一員としての自覚を育てられるようにしていきたい。　〈文責　下京雅小　上田　亮介〉

4年部会

「自分たちのくらしを支える人々のおもいや願いについて
学びを深めることで，地域社会に対する誇りと愛情をもち，
地域社会と自分とのつながりを考える子ども」

本年度４年部会では，研究主題にあるように「子どもが社会とつながる」とはどういうことなのか話し合いながら部会を進めていった。子どもたちが社会事象を身近に感じるような単元を構成した。以下，実際の実践について　詳しく述べる。

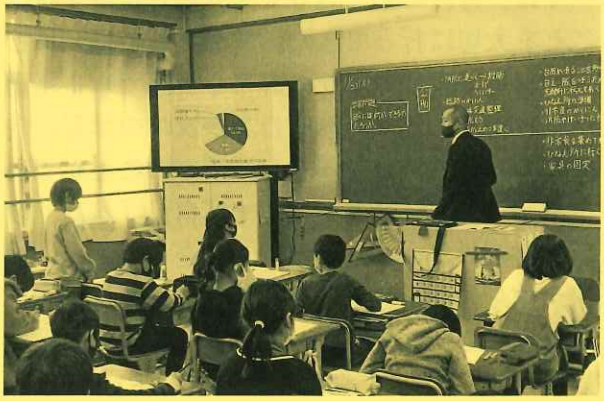
本年度の授業実践
- 11月30日　「自然災害から人々を守る」
　　大塚小学校　勝部　順也先生
- ３月上旬　「ゆたかな自然を生かす宮津市」
　　嵯峨小学校　今野　裕介先生

「自然災害から人々を守る」

学習指導要領には，「地域で起こり得る災害を想定し，日頃から必要な備えをするなど，自分たちにできることなどを考えたり選択・判断したりできるよう配慮すること。」とある。そこで，子どもたちが，どれだけ自分たちの住んでいる地域を想定できるかということと，「本当」に自分たちにできることを考えられるようにできるかということにこだわって授業づくりを行った。

①大塚災害対策本部として災害への対応を考える。
②実際に大塚小学校の校区の近く今年度の夏に起こった土砂災害の写真資料を使う。
③いろいろ自分にたちに出来そうなことを出した後に「本当にしたいのはどれか。」ということを問う

このようにねらいに迫ることで，高台に住んでいる子どもは土砂災害を想定したり，家族が多い子どもは災害時に全員がしっかり避難できるようにすることを想定した自分にできることを考えることができた。



「豊かな自然を生かす宮津市」

府内の様子を学習する場合，その社会事象を身近に考えることは子どもたちにとって難しい。どうやって身近に考えることができるか教材づくりを考えた。学習指導要領には，「特色ある地域を選定する際には，広く県内から地域を選択し，自分たちの住んでいる市と比較しながら，それらの地域の特色を捉えることができるよう配慮する必要がある。」とある。

そこで，教師から京都市と比べてどうかと問うのではなく，自分他の身近な事例である嵐山の自然景観を保護活用している様子を単元末に入れることで宮津と同じように自分たちの地域でも取り組んでいることがあることを掴ませることを狙った。嵐山には，自然景観を守るために，

①桜や松を植樹する治山の取組
②嵐山保勝会という地域の団体と中学生がともに川の外来種の水草を除去する取組
③嵐山クリーンアップキャンペーン

など，宮津の学習したことと関連付けて考えられる取組がある。このような取組があることを学ぶことで子どもたちは，府内の特色ある地域で学んだことが自分たちに住んでいる京都市でも行われていることに気づくことができる。そうすることで，宮津以前に学習した宇治や舞鶴の学習を振り返り京都市と比べて考えられるようにした。

このように，今年度は「子どもが社会とつながる」ということに焦点を当てた授業実践を行った。次年度以降も「子どもが社会とつながる」というのはどういうことなのか，どのような単元構成が有効なのか実践を通して研究を進めていきたい。　〈文責　唐橋小　仙波　俊輔〉

5年部会

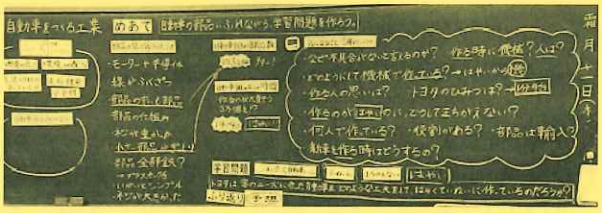
「社会のあり様や，そこに生きる人々の姿から学びを深め，
よりよい社会へ向けて，社会と自分とのつながりを考えようとする子ども」

本年度の授業実践

- 「自動車をつくる工業」
  金閣小学校　川上ありさ教諭
- 「自動車をつくる工業」
  朱雀第一小学校　根津　亮介教諭

視点１　子どもと「社会」がつながる単元構想の工夫

川上教諭の授業実践では，視点１-１，１-２として，子どもの思考の流れを大切にした単元構想の工夫を図った。「自動車の部品」というキーワードを通して，授業の中で，学習問題を立てるまでの授業の内容に一貫性をもたせることで，児童の思考の流れをスムーズに促すことができた。また，部品の実物を触ったことで，児童の自動車作りに関するイメージがより鮮明になり，具体的なイメージと意欲をもって学習に臨むことができた。このような，授業実践を進めることで，子どもが捉える問いを大切にした学習問題を作り，そして，学習問題を追究・解決する問題解決学習を進めることができた。



視点２　子どもと「社会」をつなげる授業づくり

根津教諭の授業実践では，視点２-１，２-２として，自動車づくりに目を向けるために，実際のカタログを複数車種用意し，それを見る時間をじっくりとることで自動車に興味が向くようにした。また，ロイロノートに５車種分のカタログを資料化して資料箱に残しておき，そこから自分の好みに合わせて選択して，疑似注文をした。自動車を注文したことがない子どもたちにとって自動車が少し身近に感じるきっかけ

となった。また，注文した自動車を見比べてみることで，「同じ車種を選んだとしても全く同じ自動車はないこと」「それは注文する人の好みによってかわる」ことに気付くことができ，自然と単元の学習問題に思考が向かった。

視点２-３，２-４として，単元の終末で世界で日本の自動車がたくさん売れているという事実を知り，その理由を今まで見てきた資料をもとに考えていった。つまり，資料を見る視点が「自動車工場では，一人一人ニーズのちがう自動車をどのようにつくっているのだろう」から「世界で売れる理由はどこにあるのか？」に変わるということである。今回はその資料を見る視点の変化を軸にして単元を考えた。このように「社会的事象の見方・考え方」を「問い」と「資料」で具現化しながら，多角的に考え，学習活動を進めていくことができた。

視点３　子どもの意欲や深い学びにつながる評価

子どもの意欲や深い学びにつながる評価については，毎回のふり返りでふり返る視点を持つことを大切に行ってきた。成果としては，子ども達自身が自分の学びの成果を実感できる場面が見られたことや，教師自身が次時の学習に向けての指導の振り返りをし，活かすことができたことである。しかし一方で，「自己」「相互」「教師による」といった評価の工夫をすることに課題が見られた。効果的な評価の仕方を今後，さらに考えていきたい。

〈文責　紫野小　林　奈央人〉

6年部会　「社会の発展に寄与した先人や今を生きる人の営みから学びを深め，社会と自分とのつながりを多角的に考える子ども」

今年度は，年度当初からの度重なる緊急事態宣言，まん延防止等重点措置により，学校教育活動においても，人とのかかわりをもちにくい１年であった。コロナ禍において，今までの形にとらわれず，様々な面で「変化」を求められ，いかにｗｉｔｈコロナへ方向転換できるかが鍵となってきた。実際に今年度の活動が開始できたのは，９月に入ってからであった。

２本の研究授業を予定していたが，年末からの急激なコロナウイルス感染の拡大に伴い，学級閉鎖や教職員の自宅待機等，部会内で連絡を取り合うことも難しく，部会として授業内容をしっかりと詰め切ることができない状況となってしまった。このような状況の中で丁寧に準備し，学校全体でもご協力いただき，行っていただいた授業について報告する。

本年度の授業実践
- ２月９日　「新しい日本，平和な日本へ」
  梅津小学校　岩本　雅生教諭
- ３月上旬　「世界の未来と日本の役割」
  醍醐小学校　松下　　亮教諭

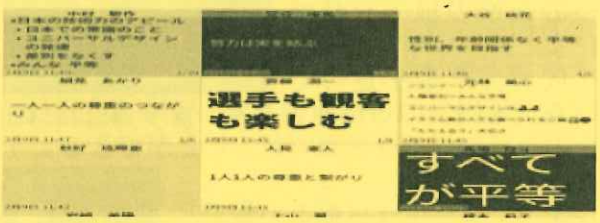
令和４年２月９日（水）
梅津小学校　岩本　雅生教諭
単元「新しい日本，平和な日本へ」

６年部会としては，子どもたちが自分ごととして捉えにくい「歴史学習」をいかに今の自分とつなげていくのかということを大切に話し合いを進めてきた。戦後の復興，豊かで平和な国へ変容したが，その裏で，さまざまな問題が起こったことをしっかりと捉えさせたい。1964年と「東京2020オリンピック」の様子や意義，メッセージを比較することで，今も残っているさまざまな問題に対しての現状や取組について考えられるようにした。

導入では，戦争直後や1964年ごろの写真，戦後から現在までの主な出来事の年表などの資料から，「なぜ，東京でオリンピック・パラリンピックが開催できたのだろう。」という学習問題を立てた。その後，連合国軍の指導による戦後の改革，国際連合への加盟など国際社会への復帰，高度経済成長について調べ，オリンピック開催に至る変容について学習した。

少子高齢化社会，人種差別，災害からの復興などさまざまな問題を抱えながらも開催された，東京2020オリンピックがどのようなオリンピックであったのかを考えることで，今自分たちが生きている社会とのつながりをもたせられるようにした。聖火ランナー，ＬＧＢＴＱの選手，ハラルフード，旗手などの資料をもとに，ロイロノートを活用して話し合った。

子どもたちは，「すべてが平等」「一人ひとりが尊重し合うべき」「国と国とが仲良くする」「性別・年齢の関係ない世界」など，東京2020オリンピックのメッセージを考えることができていた。こちらが想定していた「多様性」「協調」という語は出てこなかったが，子どもたちの言葉で同じメッセージを受け取ることができていたと考えている。



内容的には，６年の最終単元での学習と重なる部分はあるが，今残されている問題を知り，自分ごととして捉え，これから生きていく社会に対する自分なりの考えをもつことができたことは，大きな成果であったと考える。

〈文責　桂川小　橋本　堅吾〉

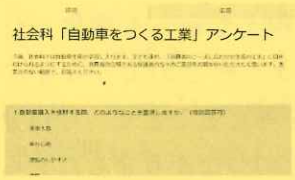
コロナ禍における学習コンテンツの作成
～社会科の授業でＧＩＧＡ端末をどう取り入れるのか～

授業場面でＧＩＧＡ端末をどのように活用するのか実践を進めてきた。昨年度から継続して，ＩＣＴ活用のアイディア例の開発とコロナ禍における教材研究支援の方法を探ってきた。

ＩＣＴ活用のアイディア例
office365，ロイロノート school

office365（Microsoft）のアプリケーションやロイロノートschool(LoiLo)を利用することが，主流となってきている。社会科の授業における学習のねらいに到達するための手立てとして，これらをどのように活用するのか検討し，ＩＣＴ活用のアイディア例にまとめることができた。

５年生の「自動車をつくる工業」の単元に入る前に保護者に対してForms上でアンケートを行った。消費者でもある保護者が自動車を購入する際に重視していることを知ることで，単元の学習問題づくりにつなげていくことができた。なお，ＩＣＴ活用のアイディア例については，研究会のウェブサイトにおいて掲載し，配信している。京都市スタンダードに掲載されているアイディア例を具現化したものもあり，引き続き取組を進めていきたい。



コロナ禍における教材研究支援
社会見学に行けない今，できること

社会見学に出かけることが制限されている現状で、取材を行って映像にまとめ，事例地と子どもたちの距離を縮めることはできないだろうかと，検討を進めてきた。

今年度は３年生の「京都市の様子」の単元から，自然に囲まれた京北地域や，文化施設などが集まる岡崎地域など８つの地域の様子を動画にまとめ，来年度の配信に向けて準備を進めている。地図上の事例地をクリックすることで，その地域の様子を動画で見ることができるようになっている。

また，３年生「京都市の様子とくらしのうつりかわり」の単元では，京都市のまちの広がりの様子を示したプレゼンテーションをご提供いただいた。取組をまとめたものを，今後，研究会のウェブサイト等で発信していく予定である。これらの取組が全市の社会科の授業づくりの一助になることを願っている。

〈文責　プロジェクト研究委員　森川　　孝〉

研究集会に向けての軌跡

研究集会に向けて，授業者である山階南小学校の猪股健悟先生に授業づくりを進めて頂きながら，研究部を中心に指導案検討に努めて参りました。猪股先生の熱心な教材研究の結果，単元の学習内容が整理されていきました。

しかし，コロナ禍の影響により研究集会が中止となり，提案する機会を得られず，そして，各学年の取組を報告する機会を得られず，非常に残念でした。

そこで，ここでは提案授業の単元の概要について述べていき，少しでも研究集会に向けての軌跡を発信していきたいと思います。

提案授業は6年生「世界の未来と日本の役割」の学習からです。本単元は，世界的な諸課題について，世界と協力しながら日本がどのような役割を果たしているか考える学習です。

提案授業を公開するにあたり，本単元では教材に工夫が見られます。その工夫とは「水」に関する問題を中心教材としたことです。この単元では世界的な諸課題について，子どもたちにとって身近な「水」を取り上げることによって，社会的事象と子どもたちとの心的な距離を近づけることをねらいとしました。事例地はウガンダです。ウガンダの水に関する問題に対し，国連や日本がどのように協力したかをうまく整理し，単元を構築して頂きました。

本時の授業については，撮影を行い社会科教育研究会のTeamsにアップロードしています。研究部を中心に授業の動画をもとに，事後研修会を行っていきます。提案して頂いた貴重な研究授業を，今後の社会科授業へとつなげていきたいと考えています。

最後になりましたが，社会科学習の核となるのは「問い」です。そして，授業づくりにおいても「どうすればよりよい授業となるのか」という「問い」は欠かせません。来年度も社会科教育研究会では，日々この問いに困りながらも，仲間と相談しながら実践を進め，全市に発信して参りたいと思います。

〈文責　研究部　部長　森元　　光〉